

干

す、漬ける、刻む、生食する、など採れたて野菜を料ることが楽しい。Mさんに「野菜作ってみーだわ」と勧められたのが夏で、それから種を播いたり苗を植えたりして秋になり、仲秋を過ぎたころから野菜に関しては自給自足状態になった。ひいき目は避けられないが、スーパーで買うそれよりずっとおいしいので、どう料理したものか気がつくとおれこれ考えている。

これまでも知人からどつさり採れたて野菜が届いたり、産直市に出くわしてしこたま買い込んだり、これに近似の状況は何度もあった。その都度「やっぱり鮮度が違うなあ」など言って、喜んで食していたはずなのだが、ここに来て料ることをせねばならぬ気になり、それが日課となり、味はもちろんのこと色合いなどにも気が向き、ついには器をも吟味して買い求めることまで始めたものである。

退職して暇になったから、と言えばその通りで、「よかつたね、楽しいこと見つかつて」とでも返されて終わりとしてもよいのだが、ならば暇を食で埋めたということかとうとうとばかりも言えない。これまでさんさん食べてきながら、考えてこなかったことがあったのだ。それにはいくつかきっかけがあった。一年前、とある温泉旅館に連泊した。家族に湯治が

必要だったのと、松浦弥太郎氏が時にはいい宿に泊まってその感性に学べとエッセイで説いていたのに従ってみたのだ。安いを最優先にしてきたこれまでを考えれば冒険なのだが、今思えば何か思い切つてみたかったのだ。地味ながらも意匠を凝らした湯、料理、調度に触れているうち、自分はこれまで切り詰めてばかりだったということに気づいた。習慣に頼つて、鈍いことに無自覚で、ただ時が過ぎるに任せていたのではなかったか。その省エネモードのおかげでたばらずに勤め続けられたとも言えるのだが。抑えていた能力を活用する好機が来たのかもしれない。それは決して他より秀でようとする能力ではなく、自分の鈍さに抗う能力である。

そんなことを考えるようになったとき、もう一つのきっかけが向こうからやってきた。種蒔く人にはそのタイミングが見えるのか、Mさんにはいいときに畑作を勧められた。Mさんはよく言う。

「どうせ食べるならおいしく食べたいがね。」

少し前なら、「そりゃあだれだつてそうでしょう」なんて言つてしまいかねなかった。今は、微笑みながらうなづく。育てる、料る、見せる、食す、それぞれに携わる者が願う「おいしい」を感受できる能力をばくはようやく磨き始めたのだ。



専業ババ奮闘記 (その2)127

## 木幡智恵美

迫りくるコロナ (2)

寛大の学年閉鎖が解けると、今度は実歩のクラスが閉鎖となり、引き続き玉湯に通うことになった。寛大を送った後、いつも一緒に園に行く実歩が家に残るので宗矢が行きたがらないかと思いきや、幸いこの日はお弁当の日で、弁当袋を手ニコニコ顔で車に乗り込んだ。

午前中は、トランプ、カルタなどをした後、クッキー作りをした。白い生地と、ココアを入れた生地を作り、あれこれ造形していく。実歩はお花作りが気に入り、花びらをココア、真ん中を白、その逆など、いくつもの花が並んだ。クッキーが焼ける間、庭で縄跳び。このところ好天で気温もこの時季にしては高く、子守をするには大助かりだ。

お昼が近くなつたので、一緒にチキンライスを作つて昼食を摂る。朝ごはんの際、いつも娘に「実歩、早く。時間ないよ」と言われているので、食べるのが遅いのは承知していたが、ためにしに時間を計つてみると、なんと四十五分かかった。保育園の給食は交代りまでするというけど、家では気を抜いているのだろうか。午後は、オセロに将棋、塗り絵。六時ごろ、娘は宗矢を保育園から、寛大を児童クラブから拾い帰つてきた。

翌日も玉湯行き。この日は昨日よりさらに好天で、残りの生地でクッキー作りをしてレンジにかけてから、近くの公園へ遊びに出かけた。縄跳びをしたり、バドミントンをしたり。昼食後、トランプで遊び、三時のおやつの後ビデオ鑑賞をしていると、寛大が帰ってきた。金曜日はスイミングで、バスが家の近くまで送つてくれる。帰ってきた寛大は、大荷物を降ろすと、水着、体操服、エプロンなどを洗濯機に入れ、ランドセルから連絡帳を出し、それを見てから宿題にとりかかった。我が子にこんな感心な子はいたのだろうか。仕事で家になかったから、詳しい状況は分からない。おそらく義母がやかましく言つても、すんなり聞くような子たちではなかっただろう。実歩はといえば、寛大が宿題をし始めると、ビデオを消し、「色塗りする」と言つて、お絵描き帳と色鉛筆を持つてくる。何と出来た子たちだ。夫の忠ちゃんは朝早く出るので、娘は弁当作りから子どもの世話、そして仕事とフル回転。それでも、子どもたちはこんな風に育つていく。我が娘ながら感心してしまった。

**30代フリーター** やあ、ジイさん。中国政府がゼロコロナ政策を大幅に緩和した。病院や施設で隔離していた感染者を、軽症や無症状なら自宅で隔離するのを認めたり、PCR検査の陰性証明を多くの場所で求めなくなったり、予想外の方向転換だ。

**年金生活者** 緩めないと国民は何をするかわからないという脅えが共産党政権にはあつたと推察される。

**30代** ゼロコロナへの抗議行動は若者らを中心に北京などいくつもの都市に広がり、習近平の退陣を求める声も聞かれた。マスメディアは「天安門事件以来」と報じた。

**年金** 今回の抗議行動と、天安門事件に行き着いた1989年の民主化運動は、ともに自由を求めた点で共通している。違いは後者がまだ手にしたことのない自由を要求したのに対し、前者はすでに手にした自由を奪われることへの抵抗だということにあった。

言い換えれば、かつての民主化運動が産業資本主義の段階の運動だったの

に対し、ゼロコロナへの抗議行動はポスト産業資本主義の段階の運動だったということだ。ゼロコロナへの怒りは資本主義の高度化が国民にもたらした消費の自由、職業選択の自由、移動の自由といった、主として経済的な自由を奪われることへの怒りだった。

ポスト産業資本主義の社会でそれらの自由を奪われることは、広がった自由が元の小さいサイズに戻るだけでは済まない。生活、生存が脅かされる。それらの自由なしには生活、生存が困難な仕組みの社会になってしまっているからだ。

**30代** 日本のマスメディアでは、共産党政権は自らの誤りを決して認めないから、ゼロコロナ政策はやめないだろうといった予測が報じられた。

**年金** そうした予測は、いったん決めたことは状況が変わっても変えようとならない日本の組織の体質を投影した見方のように感じられる。リスクがインフルエンザ以下に低下したコロナをいまだに結核やSARSと同等の2類相

当扱いしているのはそうした体質のあらわれだ。

かつての中国の民主化運動が「制度としての自由」を求める運動だったのに対し、今回の抗議行動は「生活上の自由」を求める運動だった。前者が共産党1党支配の否定につながる要求を掲げていたのに対し、後者は体制の否定ではなく政策の否定にとどまった。だから、政権も譲歩しても自らの正統性が損なわれることはない判断したのだろう。

**30代** 日本で中国のような転換ができないのはなぜなんだ。

**年金** 決めたことを変えるには変える力を要する。中国がゼロコロナを変えることができたのは、いつでもそうした力を振るうのをいとわない国だからだ。それは国家原理を貫くことを意味する。国家の国家たるゆえんのひとは強制する力を振るえるところにある。中国はその力が「皇帝」に集中した「帝国」であり、「皇帝」たる習近平の決断ひとつで方向転換することができる。

日本政府がコロナ政策を肝心なところで転換できないでいるのは、国家原理を貫くことを当たり前と考える習慣を持つていないからだ。歴史をさかの

ぼると、国家のない時代が長く続き、そのときに培われたメンタリティーを日本人が今なお保持し続けていることにそれは由来する。

**30代** 新型コロナウイルスに対して、日本国民は政府による「強制」ではなく「自粛」によって自らの行動を制限してきた。

**年金** 国家が誕生する以前の社会で支配的だった互酬の原理が働いた結果と考えることができる。「自粛」は、他人に迷惑をかけたくない、他人に借りをつくりたくないという心理に根ざしている。それは何かを贈られたり、してもらったりしたら、お返しをしないではいられない互酬の原理にもとづく。これは国家のない氏族制の時代、日本なら縄文時代に支配的な原理だった。それが1万年も続いたため、この原理が日本人のメンタリティーに深く

刻み込まれ、いまなお行動を左右していると考えられることができる。

**30代** 日本でも国家が誕生してだいぶたつのに。

**年金** 天皇制が互酬原理を温存する役割を担ってきた。縄文時代の終わつたあとに成立した大和王権はこの原理を支配の方法として採り入れた。大和王

ニュース日記 859  
**中村 礼治**

## 皇帝の国と天皇の国

権は日本列島に初めて誕生した統一国家だ。国家である以上、それは互酬ではなく、強制を原理とするはずだ。ところが、この王権は群立していた小さな国家との間に互酬の関係を結ぶことによって支配を広げていった。吉本隆明がそれを指摘している。

それによると、大和王権は自らのもつ宗教や法、習慣を、群立する小国家のそれと交換することによって、統一国家をつくつた（「敗北の構造」）。言い換えれば、王権の側が小国家の信仰する神を拝み、その法や習慣を尊重したので、小国家のほうもお返しに王権側の神を拝み、法や習慣を尊重せざるを得なくなった。それは信仰と遵守の贈与であり、その返礼を意味する。

その結果、日本人は国家運営の多くが強制よりも互酬によってなされていると考えるようになった。象徴天皇制への圧倒的な支持はそれを物語っている。2019年の毎日新聞の世論調査では、「現在の象徴天皇制でよい」が74%だった。